民主香川
定価　月100円
発行所
民主香川社
高松市藤塚町3丁目13－14
☎(087)834-7311

太平洋戦争開戦の日に戦争について考える12・8集会の報告（1）

8・15戦争体験を語り継ぐつどい実行委員会　代表　杉村智子

＊長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会の井上洋子代表の「日本政府は長生炭鉱の遺骨を見捨てるのか」についての12月8日の講演の杉村代表の報告を、2回にわけて掲載します。

【「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」発足と慰霊碑建立まで】

山口県宇部市にあった長生炭鉱は1942年2月3日、天盤が崩れる大事故を起こしました。この事故で183人が犠牲になり、内136人が朝鮮半島出身者で、そのほとんどが「強制連行」されてきた人たちでした。この炭鉱はもともと違法構造の炭鉱であり、何日も前から事故の予兆があったのに掘削を止めませんでした。未曽有の大事故にも関わらず当時の新聞報道は小さな記事で知らされただけでその後、坑口も閉ざされて遺骸は海の底に放置されました。今も海岸にはピーヤ（排気・排水筒）が残されています。

「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」（以下「刻む会」）は1991年3月に発足しました。きっかけは郷土史研究者山口武信氏（初代代表）の調査ノートからでした。発足当初は資料・証言収集、ピーヤの保存、追悼碑建立（すでに地元有志による碑はあったが強制連行の事実は隠されたまま）の三点を目標に研修や地元宇部市との交渉などの活動を積み重ねていきました。そして犠牲者の本名（創氏改名で日本名だった）を「殉職産業人名簿」に照らして明らかにした後、犠牲者の本籍地にお詫びの手紙を出します。そのことで初めて自分の家族が長生炭鉱で命を落とした事実を知った遺族らは「遺族会」を結成し翌年から追悼行事に毎年参加するようになりました。活動を始めて22年後、2013年には念願の追悼碑が市民募金で建立されました。

平和と安全な暮らしを守る県政へ　樫県議の委員会質問　その2

11月26日、総務委員会（総務・危機管理総局・公安委員会関係）質問より

②高松空港の軍港化はやめよ

高市首相の「台湾有事」は「存立危機事態になり得る」という国会での答弁が深刻な国際問題になっています。

香川県では昨年3月末、高松港の「特別利用港湾」の指定を受け入れ以降、頻繁に海上自衛隊の艦船がサンポートに来るようになり、善通寺自衛隊の開設75周年にはブルーインパルスの展示飛行、実戦さながらの模擬戦闘訓練も行われ、今年5月には高松空港を「特定利用空港」として指定の検討【2面に】

太鼓台

「もっとうまく字が書けたらいいのに」。「さらっと字が書きたいな」こんな声を聴く今日このごろです。

香川県は書写教育に熱心でした。国語科に含まれる書写が書写部会として存在していました。書写部会の教員が携わっていた行事は各クラスで代表一名を選出して夏休み前猛練習する「競書会」、秋の「教育文化祭」、冬休み明けの「書き初め展」、そして、夏休み中の様々な作品募集（名簿の一覧表を作成して募集要項に沿って作品をチェックして送付するなどの仕事）です。書写部員が浄書係を担い、卒業証書や賞状の名前、立て看板を書くこともありました。

現在は卒業証書の名前もパソコンで打ち出しとなりました。60年も続いていた「競書会」もなくなり、古くは高松市民文化センターが取り壊しになった時に掲示場所がなく、「書き初め展」も中止になっていました。書写部会がなくなり、国語科部会に帰還したようです。雑用に追われない教員が増えますように。【S・W】

学校を守ろう　三豊・観音寺教育をよくする会

三豊・観音寺の教育をよくする会と地域の学校を守る有志の会は11月29日、公立学校の統廃合に抗うとして、旧高瀬町の教育長を務めた小野健一氏を招いて三豊市で講演会を開き、約50人が参加しました。

小野氏は、徒歩通学の重要性などを語り、「子どもの住む地域に小規模でも幼稚園や小学校が必要だ」と強調。人口が減り、過疎化が進む地域で公立学校が統廃合で無くなれば、子育て世代などがいなくなると指摘しました。

教育をよくする会の澁谷光博会長と、有志の会の岩田仁美代表がそれぞれ活動を報告しました。岩田氏は「私たちは一貫して地域の学校を守っていく」と述べました。

【3面から】

なるためにICTの活用や職員ひとりあたりの平均経験年数が10年などの条件つけないでほしい」「少ない子どもと多い保育士で保育したい」などと訴え、白川氏が「保育士の現場で嬉しいことや悲しいことはありますか」とたずねると、「子どもの心の動きや葛藤、成長などを保護者と共有できて、子どもの初めての瞬間（歩くなど）に立ち会えてうれしい」などと思いが語られました。

白川氏は大軍拡やアメリカ・大企業言いなりの政治を転換し、「保育や福祉など暮らしを支えることが根本だ」と強調。「皆さんが子どもたちのためにもっとよくできて、悲しさ、悔しさを喜びに変えられる保育現場にしていきたい。全力でいのちの声を国会へ届けます」などと述べました。

讃岐の文学碑めぐり　㉟

「徒然草」と静御前の墓（三木町井戸）

文・写真　深沢　雨根

三木町井戸の鍛冶池のほとりに静薬師庵があり、そこに源義経の愛した静御前の墓と伝えられる五輪塔がある。静御前の生没年は不詳だが、当代隋一の舞曲にすぐれた美しい白拍子（しらびょうし）（舞姫）であった。「徒然草」の第二百二十五段には、「禅師がむすめ、静と言いける、この芸をつげり。これ白拍子の根源なり。仏神の本縁をうたふ」と記述されている。

静は16歳のとき都で義経と出会い、恋に落ちた。

一一八五年、兄頼朝に追われる身になった義経は、静と吉野で別れた。吉野は女人禁制の山である。翌一一八六年、静は捕らえられて母磯禅師（そのぜんじ）とともに京都から鎌倉に送られた。静は義経の所在を訊問されたが、知らないと言い通した。義経の子を妊娠していた静は、出産後に放免されることになった。四月、鶴岡八幡宮で奉納舞いが行われ、静は頼朝らの武将を目の前にして堂々と義経を恋慕う和歌を謡いながら舞った。頼朝を激怒させたこのシーンは、今も語り継がれる名場面である。そのとき静が詠んだ歌は、

よし野山　みねのしら雪ふみ分て　入りにし人のあとぞ恋しき

七月、静は男児を産んだが、その日のうちに赤子は由比ガ浜で殺された。九月、静は許されて京都へ帰ったが、その後の足跡については「吾妻鏡」に何も書かれていない。

伝説によれば、静は母とともに京都から讃岐へ来て、長尾寺で得度（とくど）して尼になったという。長尾寺には、静が出家したとき髪を埋めた「静御前剃髪塚（ていはつ）」がある。近くに庵を結び、亡き義経と赤ん坊の冥福を祈る日を送り、24歳で亡くなったという。

静の墓は、三木町下高岡の願勝寺にもあり、境内の梵鐘（ぼんしょう）には「静御前の舞い姿」が浮き彫りにされている。願勝寺は静の菩提寺として建立された寺である。

静が讃岐に来たのは、母の磯禅師が大内町丹生（にぶ）小磯の生まれだったからと言われている。長尾町の県道十号線（長尾街道）沿いに磯禅師の墓がある。

静御前の五輪塔

静薬師庵（三木町）

3年間連載してきた「讃岐の文学碑めぐり」は今回で終わりとなります。長期にわたり執筆いただいた深沢さんには心より感謝致します。